

歴史講座「鎌倉時代の三浦一族 ―三浦義村の実像―」

第1回 幕府の中の義村

二〇二三年一月四日 オンライン 高橋 秀樹

はじめに

一、畠山重忠事件・牧氏事件における義村

史料①『明月記』（藤原定家の日記）元久二年（一二〇五）六月二十七日条 また云く、

関東に兵乱あり。庄司次郎某誅せられおわると云々。時政脚力をもつてこれを申すと云々。

史料②『吾妻鏡』元久二年六月二十三日条 晴れ。未の刻相州已下鎌倉に帰参せらる。

遠州戦場の事を尋ね申さる。相州申されて云く。重忠の弟・親類大略もつて他所に在り。

戦場に相従うの者僅かに百余輩なり。然れば謀叛を企つる事すでに虚誕たり。もしくは議

訴により、誅戮に逢うか。はなはだもつて不便。斬首陣頭に持ち来たる。これを見て年来

合眼の昵を忘れず。悲涙禁じ難しと云々。遠州仰せらるるの旨無しと云々。酉の刻鎌倉中

また騒動す。これ三浦平六兵衛尉義村思慮を廻らし、経師谷口において榛谷四郎重朝・同

嫡男太郎重季・次郎秀重等を謀するなり。稲毛入道大河戸三郎のために誅せらる。子息小

沢次郎重政は宇佐美与一これを誅す。今度の合戦の起こりは、偏えに彼の重成法師の謀曲

に在り。所謂右衛門権佐朝雅畠山次郎に遺恨有るの間、彼の一族反逆を巧むの由、頻りに

牧の御方（遠州の室）に讒申するにより、遠州ひそかにこの事を稲毛に示し合わさるるの

間、稲毛親族の好（よしみ）を変じ、当時鎌倉中に兵起有るの由、重忠に消息するに就き、途中に

おいて不意の横死に逢う。人もつて悲歎せざるはなしと云々。

七月八日条 畠山次郎重忠余党等の所領をもつて勲功の輩に賜う。尼御台所の御計らい

なり。将軍家御幼稚の間、かくの如しと云々。

閏七月十九日条 晴れ。牧の御方姦謀を廻らし、朝雅をもつて関東の將軍となし、当将

軍家（時に遠州亭に御坐す）を謀り奉るべきの由その聞こえ有り。よつて尼御台所長沼五

郎宗政・結城七郎朝光・三浦兵衛尉義村・同九郎胤義・天野六郎政景等を遣わし、羽林を

迎え奉らる。即ち相州亭に入御するの間、遠州召し聚めらるる所の勇士悉くもつて彼の所

に参入し、将軍家を守護し奉る。同日丑の刻遠州俄にもつて落飜せしめ給う（年六十八）。

同時に出家するの輩勝計すべからず。

史料③ 『愚管抄』(撰関家出身の高僧慈円の歴史書) 卷第六 サテ関東ニテ又実朝ヲウチコロシテ、コノ友正ヲ大將軍ニセント云コトヲシタクスル由ヲ聞テ、母ノ尼君サハギテ、三浦ノ義村ト云ヲヨビテ、「カ、ル事聞ユ。一定也。コレタスケヨ。イカバセンズル」トテアリケレバ、義村ヨキハカリ事ノ物ニテ、グシテ義時ガ家ニヲキテ、何トモナクテワザト郎等ヲモヨラシアツメサセテ、イクサ立テ、「將軍ノ仰ナリ」トテ、コノ祖父ノ時正ガ鎌倉ニアルヲヨビ出シテ、モトノ伊豆国ヘヤリテケリ。

二、実朝の「御乳母夫」

史料④ 『吾妻鏡』 建永元年(一二〇六) 十月二十日条 陰り。(源頼家) 左金吾將軍の御息の若君(のちの公暁)

〔善哉公〕 尼御台所の仰せにより、將軍家の御猶子として始めて営中に入御す。御乳母夫三浦平六兵衛尉義村御賜物等を献ず。

史料⑤ 『岡屋関白記』(前関白太政大臣藤原兼経の日記) 寛元四年(一二四六) 六月二十

日条 小童(のちの宗尊親王室藤原宰子) 着袴の事有り。(藤原兼平) 右大臣その腰を結ぶ。密儀たるにより具に記すにあ

たわず。(中略) すなわち右大臣還られおわんぬ。次いで小童彼の槐府に向かう。猶子たるべきの故なり。丞相手本を送らると云々。今日の事正室(兼平室、藤原実有女) 一向に沙汰有り。

史料⑥ 『吾妻鏡』 文治四年(一一八八) 七月十日条 若公(のちの源頼家) 万寿公。七歳 始めて御甲

を着せしめ給う。南面においてその儀有り。時刻。二品出御。(北条義時) 江間殿参進し御簾を上げ給う。次いで若公出御。武藏守義信(乳母夫)・比企四郎能員(乳母兄) これを扶持し奉る。(源実朝)

史料⑦ 『吾妻鏡』 建仁三年(一二〇三) 十月八日条 天霽れ、風静かなり。今日將軍家(北条時政) 〔年十二〕 御元服なり。戌の刻遠州の名越亭においてその儀有り。前大膳大夫広元朝臣・

小山左衛門尉朝政・安達九郎右衛門尉景盛・和田左衛門尉義盛・中条右衛門尉家長已下の御家人等百余輩侍の座に着す。江間四郎主・右近大夫将監親広雜具を持参す。時刻出御。理髪遠州。加冠前武藏守義信。次いで休所に渡御する後御前物を進む。江間・親広陪膳たり。役送結城七郎朝光・和田兵衛尉常盛・同三郎重茂・東太郎重胤・波多野次郎経朝・桜井次郎光高等なり(おのおの近習の小官の中、父母見存の輩を撰ばれこれを召すと云々) 次いで鎧・御劍・御馬を奉る。佐々木左衛門尉広綱・千葉平次兵衛尉常秀以下これを役す。

三、和田合戦

史料⑧ 『吾妻鏡』 建保元年(一二二三)

史料⑨ 『明月記』 建保元年五月九日条

二日、壬寅。陰り。筑後左衛門尉朝重義盛の近隣に在り。しかるに義盛の館に軍兵競い集まる。その粧を見、その音を聞き、**戎服を備え、使者を発し、**事の由を前大膳大夫に告ぐ。時(中原広元)に件の朝臣の賓客座に在り。盃酒方酣。亭主これを聞き、**独り起座し御所に奔り参る。**次いで三浦平六左衛門尉義村・同弟九郎右衛門尉胤義等始めは義盛と一諾を成し、北門を警固すべきの由、同心の起請文を書きながら、後にはこれを改変せしむ。兄弟おのおの相議して云く、曩祖三浦平太郎為繼、八幡殿に属し奉り、奥州の武衡・家衡を征して以降。飽くまでその恩禄を啄む所なり。今内親の報に就き、忽ちに累代の主君を射奉るは、定めて天譴を遁るべからざる者か。早く先非を翻し、彼の内儀の趣を告げ申すべし。後悔に及び、則ち相州の御亭に参入し、**義盛すでに出軍の由を申す。**時に相州囲碁会有り。この事を聞くといえども、敢てもつて驚動の氣無し。心静かに目算を加うるの後、起座し折烏帽子を立烏帽子に改め、水干を装束し、幕府に参り給う。しかるを義盛と時兼(横山)と謀合の疑い有りといえども、今朝の事に非ざるかの由、猶予するの間、御所においては敢て警衛の備え無し。然れども**両客の告げにより、**尼御台所ならびに御台所等営中を去り北御門を出で、鶴岳別当坊に渡御すと云々。(中略)次いで広元亭、酒客座に在り。いまだその砌を去らず。義盛の大軍競い到り門前に進む。(中略)淵酔の士軍に敗れ没す。その後凶徒横大路に到る。

戌の時ばかり参院す。(藤原信能)中宮権亮あらあら関東の事を語る。二日申の時、和田左衛門(義盛)の宿所、忽ちに甲兵の音を聞く。(中略)その近辺の宿所の者(又左衛門尉)これを聞き、即ち戎服を備え、使者を広元朝臣に発す。時に件の朝臣の賓客座に在り。杯酒方酣。亭主これを聞き、**独り起座し將軍の在所に奔り参る。**相共にその所を逃げ去り、故將軍の墓所堂に赴く。この間、義盛の甥三浦左衛門義村(もとより叔父と違背し、仇讐となる)義盛すでに出軍の由を告ぐ。両人の告げにより、母儀・妻室等わずかに逃げ出だすの間、義盛の兵すでに進み、先ず広元の宿所を囲む。酒客いまだ去らず。大軍忽ちに至る。酔郷の士、数により害せらる。即ち放火しその城郭を焼く。室屋一字を残さず。二日の夕より四日の朝に至るまで攻戦やまず。三たび華注を周るが如し。義盛の士卒一以当千、天地震怒す。この間、千葉の党類(常胤の孫子)・練精の兵隣国より超え来たる。義盛、兵尽き矢窮まるといえども、疲足の兵に策ち、新羈の馬に当たる。しかるになお追ひ奔り北に逐い、横大路に至る。この時義村の兵またその後ろを塞ぎ、義盛を大破す。(ここにより遂に免るを得ず、多くの散卒等浜に出で、船に棹さし安房の方に向かう。その勢五百騎ばかり、船六艘。

御所の西南政所前において御家人等これを支う。(中略) およそ義盛ただに大威を播くのみならず、その士卒一以当干、天地震怒に相戦う。(中略) 暁更に臨み、義盛ようやく兵尽き筋窮まる。疲馬に策ち、前浜の辺りに遁れ退く。(後略)

三日、癸卯。小雨そそぐ。(中略) 義盛時兼の合力を得、新羈の馬に当たる。(中略) 軍兵これを拝見せしめ、悉くもって御方に参る。また千葉介胤党類・練精の兵を引率し馳せ参る。(中略) 数卒等海浜に出で、船に棹さし安房国に赴く。その勢五百騎、船六艘と云々。

史料⑨ 『古今著聞集』(十三世紀半ばに橘成季が著した説話集)

千葉介胤綱三浦介義村を罵り返す事

鎌倉右府將軍家に、正月朔日大名ども参りたりけるに、三浦介義村もとより候て、大侍の座上に候けり。その後千葉介胤綱参りたりける。いまだ若物にて侍りけるに、多くの人を分け過ぎて、座上せめたる義村が猶上にて候りける。義村しかるべくも思はで、憤りたる気色にて、「下総犬はふしどを知らぬぞとよ」と云いたりけるに、胤綱少しも気色変はらで、とりあへず、「三浦犬は友をくらふ也」といひたりけり。輪田左衛門が合戦の時のことをおもひていへるなり。ゆゑ、しくとりあへずはいへりける。

史料⑩ 『雑談集』(十四世紀初めに無住が著した仏教説話集)

故義時三度の難を逃れ

て、その身久しく保たる。一には輪田左衛門尉、世を乱しし時、故駿河の前司、平六兵衛尉とて、北門堅めたる起請かきながら、反忠して彼の一門ほろびおわんぬ。

おわりに

※ 『明月記』と『吾妻鏡』に共通する字句・表現をゴチックで示した。

【参考文献】 高橋秀樹 『三浦義村』(人物叢書、吉川弘文館、二〇一三年)

【史料】 『翻刻明月記』(冷泉家時雨亭叢書別巻、朝日新聞社)、 『新訂吾妻鏡』(和泉書院)、

『愚管抄』(日本古典文学大系、岩波書店)、 『岡屋関白記』(大日本古記録、岩波書店) 『古今著聞集』(日本古典文学大系、岩波書店)、 『雑談集』(中世の文学、三弥井書店)